


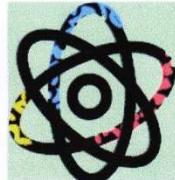
Great People on Nuclear & Rad.

会報

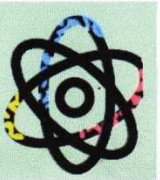
社団法人 日本技術士会
The Institution of Professional Engineers, Japan
原子力・放射線部会
<http://www.engineer.or.jp/dept/nucrad/open/>



第6号
[5周年特別号]
2009.9.30 発行
編集: 広報幹事
pwd78n32dy@mx1.ttcn.ne.jp



技術士制度に期待する



—原子力・放射線部会創立5年目を迎えて—

自戒 三つのフレーズ

工学院大学理事長
大橋 秀雄



私が原子力と関わったのは、1976年原子力工学試験センターでバルブの信頼性実証試験を担当したとき以来である。それからもう30年、センターは途中原子力発電技術機構と名を変えて、昨年使命を終えて解散した。懐かしいNUPECを清算人として見送るとは、世の流れとはいえ寂しいものだった。その間、資源エネルギー庁の原子力発電技術顧問会に15年余にわたって名を連れ、運転管理等部会や検査部会の部会長を務めさせていただいた。多くの不具合や事故の報告を聞き続け、福島第二3号機や美浜2号機の事故の際には、事故調査委員会の一員として原因解明に当たった。

それらの経験から、いま原発を守り続ける若い方々に、自家製の三つのフレーズをお贈りする。

- ◎ ひとつは、何を知らないか知ることができない。
科学の進歩につれて、自然の掟について驚くほどのことを知るようになった。最近のコンピューターシミュレーションは、何もかも分かったような錯覚

を与える。だけど、知らないことがまだまだあることを否定できないでしょう。口惜しいながら、何をまだ知らないのか、知ることができない。知らないことが原因で事故が起こる可能性は、いつまで経っても消えない。

◎ 神は予兆を発し給う。

人知を越えた事故が起こることは、否定できない。しかし心優しい神は、ドンと事故を起こす前に、予兆を発して下さることが多い。福島第二3号機の時も、水中軸受リングが完全脱落する前に、溶接クラックの発生を通じて過大応力の悲鳴を伝えて下さった。しかし、悲鳴が発するメッセージを読み違えたのである。運転中の機器の前に立つとき、大丈夫だなと思って立つのと、何か予兆があるはずだと思って立つのとでは、天と地の違いが生まれる。

◎ 他責をなじっても、何も変わらない。自責に應えるとき、前進が始まる。

他人の責任を、理路整然と声だかに指摘する人は多い。しかし、何も変わらないか、変わるのに長い時間を要するのが常である。自らの責任を自覚し、それに応えるとき、それこそが明日から始まる前進の糸口となる。

